特集 ふたつの「みんぱく」

―武蔵野から千里へ―

青雲の志に燃えて、アチック・ミューゼアムを開いた渋沢敬三。長じて、彼は、私財を拠出、高橋文太郎らとはからって、武蔵保谷の地に、野外博物館「スカンセン」の日本版建設を夢見た。渋沢は、常に現実を見きわめて対処した、稀有なリアリストだった。「夢」の実現をめざし、自己の信念に忠実な、心優しいロマンチストでもあった。今も、多くの人たちに敬慕されている。そして、七〇年前の「夢」を今によみがえらせようと、多くの人たちが参集した

1960年2月　民族学博物館内にて、仲間と語らう渋沢敬三（左端）〈渋沢史料館所蔵〉

2009年11月8日　銘板除幕式につどう関係者たち
〈提供・高橋文太郎の軌跡を学ぶ会〉

姿をあらわした銘板〈撮影・太田心平〉

渋沢雅英氏と高橋文彦氏による除幕
〈撮影・太田心平〉

みんぱく創設の系譜
―渋沢敬三の遺言

須藤健一（すどう けんいち）
国立民族学博物館長

館長就任一年。オセアニアの海外移住や民主主義の研究をしてきたが、最近は日本の外国人受け入れと日本社会の多文化・多元化についての関心が強い。

みんぱくの日本の文化展示には、運搬具や農具、はきもの・かぶりものなどが所せましと並んでいる。なかには国指定重要有形民俗文化財もある。みんぱくが創設された一九七四（昭和四九）年の所蔵標本資料は三万点弱。そのほとんどは、アチック・ミューゼアムが玩具研究と、本格的な民具研究にのりだした昭和のはじめから集めてきた日本の農山漁村の民俗資料である。

高橋文太郎さんが研究したわかんじき〈日本の文化展示〉

◉日本の民族学の育ての親

このアチック・ミューゼアムの創設者である渋沢敬三（しぶさわけいぞう）さんは、一九二一年に郷土玩具の研究をはじめ、翌年から三年余は銀行員としてロンドンに滞在した。その間、ヨーロッパ各地の美術館や博物館を見て回り、スウェーデンのスカンセン野外博物館には感激したという。生活用具を民家ごと展示し、人びとの生活をリアルに表現していたからである。

帰国後、渋沢さんは勤務のかたわら日本各地へ調査旅行に出かけ、同時に共同研究を組織して多くの民俗学者を支えた。自宅車庫の屋根裏（アチック）は博物館（ミューゼアム）にした。そして、一九三四年の日本民族学会の設立にかかわり、三七年には日本民族学会附属研究所を開設した。渋沢さんは、独自の常民文化の学風を形成するとともに、多数の研究者や学会活動を支援した。まさに日本の民族学・人類学の育ての親とされる所以である。

重要文化財のおしらさま（複製）〈日本の文化展示〉

◉民族学博物館の建設へ

渋沢さんは、「日本に民族学博物館ひとつないようでは話にならん、これは国立でつくるべきだ」と創設運動にとりかかる。一九三六年、白鳥庫吉（しらとりくらきち）さんら学会幹部と皇紀二千六百年記念事業として「日本民族博物館設立建議案」を文部大臣に提示した。しかし、日中戦争に奔走していた国を相手に、その実現は無理と判断した渋沢さんは、アチック同人の高橋文太郎（たかはし ぶんたろう）さんと私財を投じて「私立の博物館」をつくることにする。それが、一九三九年に保谷村（ほうや）（現、西東京市）にできた民族学博物館で、これこそがみんぱくの「祖型」である。

渋沢さんは、この民族学博物館を一九四四年に日本民族学協会（日本民族学会の後身）に寄贈し、その後この博物館資料は文部省に寄付された。六四年あらたに発足した日本民族学会は国立民族学研究博物館の設置運動をすすめ、六五年に日本学術会議はその設置勧告を総理大臣におこなった。勧告の九年後、大阪の万博跡地にみんぱくが創設され、二万八千点のアチック・ミューゼアムの標本資料は、国文学研究資料館（旧文部省史料館）から本館に移管されたのである。

◉みんぱくのこれから

渋沢敬三さんのご子息、雅英さんはみんぱくを訪れた際に、梅棹忠夫初代館長から「渋沢敬三先生の遺言が現在のみんぱくになった」といわれたという。梅棹さんは、自分自身を「みんぱく創設までのながいリレーのなかの中間走者の一人」と語っている。

みんぱくの「ご先祖さま」の夢と創設者の理念をこれからのみんぱくにどのように生かしていくかがわれわれの大きな責任である。

民族学博物館のアイヌ住家

宮本 瑞夫（みやもと みずお）
財団法人宮本記念財団 理事長
専攻は日本近世文学・日本民俗学。現在の関心事は、渋沢敬三・宮本馨太郎などアチック関係フィルムの再生・活用・公開。おもな編著書は『説話文学史』（明治書院）など。

一九五四（昭和二九）年五月八日、文部省文化財保護委員会記念物課の一行十名が、春季ピクニックと称して、保谷の民族学博物館のアイヌ園を訪問している。すでに、このアイヌ園については、完成間もない一九五二（昭和二七）年九月、浦谷記念物課長の視察もおこなわれており、このことは、日本初といってもいいこの本格的オープン・フィールド・ミューゼアムに対する、その道の専門家の関心の高さを示しているともいえよう。

◉野外博物館の構想

もともと民族学博物館を建設するに当たって、保谷の地が選ばれることになったのは、当初から、渋沢敬三先生に、日本各地および周囲諸民族の住家・野外建造物、民俗植物園を含む一大民族学博物館の構想があって、実現したものであるといわれている。

その後、民族学博物館は、渋沢先生の手を離れ、日本民族学協会に引継がれたが、第二次大戦、戦後の農地解放問題などで野外博物館構想は延引し、漸く一九四八（昭和二三）年末、東京都農地委員会の理解ある処置と文部省の援助をえて、ここに当初の計画を実現出来る運びとなったのである。

早速、翌四九年一月、日本民族学協会の企画委員会で、アイヌ住家の建設が決定し、建設委員、同監事が委嘱された。委員には、金田一京助・今和次郎・渋沢敬三・宮本馨太郎などの諸氏が、また同監事には、唐木栄一郎氏が委嘱され、建設準備に取り掛かることになった。結局、実際の実務は、アチック・ミューゼアム以来関わってきた父・宮本馨太郎と唐木氏が当たることになった。

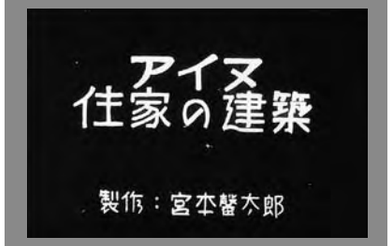
父・馨太郎は、一九三七（昭和一二）年、アチックの収蔵民具が保谷に移管されると保谷の民族学研究所の研究員となり、後には博物館主任となり、収蔵民具の台帳作成に当たり、戦後は、敷地や建物の管理などにも当たることになった。父の気持ちとしては、一途に、渋沢先生への責任を果たすということであったようだ。

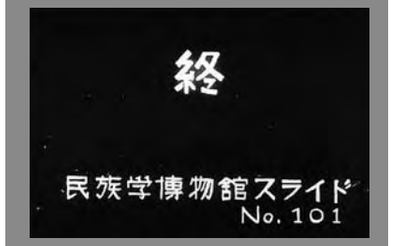
◉アイヌ住家の建設

建築は、当時の日高国沙流郡平取村二風谷に在住の二谷国松（六三歳）・一太郎（五八歳）・善之助（五三歳）の三兄弟に依頼し、栗・唐松・茅など主要材料は、輸送の関係から、山梨・長野などで調達することになった。

家造り（chise-kar）の仕事は、一九五〇（昭和二五）年三月一五日に地鎮祭（chise-kote-inonnoitak）、一八日には、十数名の人夫を動員して古式通りの屋根上げ（chise-puni）をおこない、母屋（chise）・納屋（sem）・熊檻（heper-set）・祭壇（inaw-san）倉庫（pu）・男厠（okkayo-ru）・女厠（menoko-ru）の順に建設され、二五日、予定通り新築落成の式（chise-nomi）が執りおこなわれた。

当時、既に北海道でもおこなわれることのなかったアイヌ住家の本格的建築が東京でおこなわれたということは、画期的な試みとして、記憶に止どめられてしかるべきであろう。





1950年3月、民族学博物館構内に、二谷国松氏らによってアイヌ住家が建築された。これは、その折の工程記録の一部

あれから七〇年

近藤 雅樹（こんどう まさき）
民博 民族文化研究部
イラストレーター、兵庫県立歴史博物館学芸員などの経歴がある。わたしの「夢」は、みんぱくで渋沢敬三没後五〇周年記念の特別展を実現し、退職したら「日曜画家」になること。

西武池袋線の保谷駅に降り立ったのは、昨年一一月八日、日曜日の朝だった。日本最初の野外博物館があった場所に、市民有志の会が設置した銘板の除幕式が催される。この博物館を「日本民族学会附属民族学博物館」といった。

須藤健一館長と同僚の太田心平助教は、すでに到着していた。坂口光治西東京市長、高橋文彦氏、宮本瑞夫氏らの姿もあった。

高橋家の歴代は、武蔵野鉄道（現在の西武鉄道）に取締役として重きをなした。文彦氏の父君文太郎も、一九三六年に重役に就任、明治大学を卒業したばかりの若さだった。

瑞夫氏の父君馨太郎は、戦時下に博物館の維持に尽力し、国立民族学博物館の礎となった資料（アチック・ミューゼアムのコレクションなど）を守り抜き、戦後の文化財保護行政に重要な役割を担われた。

渋沢家の方たちが到着し、除幕式が始まった。敬三の長男渋沢雅英氏、坂口市長、須藤館長の祝辞に続き、国立民族学博物館の初代館長梅棹忠夫氏から寄せられた長文の祝電が披露された後、雅英・文彦両氏によって幕に懸けた紅白の綱が解かれると、美しい銘板が姿をあらわした。

式典は、この銘板が有志の会から市に寄付されることを謳って滞りなく終了。保谷駅前の市立図書館・公民館に移動した一同は、そこで写真展「民族学博物館と渋沢敬三・高橋文太郎—かつて保谷にあった民族学博物館」を見学。一九三九年五月の公開以来、一九六二年秋に閉館するまでの四半世紀をモノクロ写真で回顧した。

このとき、わたしは「渋沢敬三と民族学博物館」と題して講演する栄に浴した。会場には、岡正雄の薫陶を受けられたヨーゼフ・クライナー博士の姿もあった。奇しくも、この日は、敬三の祖父渋沢栄一の命日だった。

博物館の本館内部。当時掛けてあった看板も、最近みつかった（みんぱく所蔵）〈背景の写真は、西東京市中央図書館所蔵〉

最初に移築展示された武蔵野の民家
〈写真は西東京市中央図書館所蔵〉

民族学博物館と渋沢敬三・高橋文太郎

地域の歴史を後世につなぐ

高田 賢（たかた まさる）
高橋文太郎の軌跡を学ぶ会（西東京市）代表

西東京市下保谷に生まれ、現在まで住む。若年のころより柳田国男や民俗学に関心をもち続ける。この数年は本会の充実・運営に力を注ぐ。

西東京市の旧下保谷にかつて在った民族学博物館やその創設に力を尽くした渋沢敬三や高橋文太郎のことは、地元の旧住民でさえ忘れかけていた。まして新住民は知る由もない。

100点近く並べた民具展。手前は藍染めの実演〈撮影・高橋俊郎〉

パネル写真展の準備。87点の写真に観客盛況〈撮影・亀田直美〉

今から半世紀以上も前のことであり、今はその痕跡のかけらも残っていないばかりでなく、事実についての資料もそしいからである。

◉勉強会の蓄積と冊子の刊行

このことを深く憂慮する市民有志が、せめてその実情を明らかにしたいという願いから勉強会を始めた。二〇〇七年春のことである。文献を集めて整理し、写真を探し、当時かかわった方々に話を聞くなどの手立てをつくして資料を作り、会で報告した。また広く市民に知っていただくため、専門家の講演会を開いた。

かくして、ある程度勉強の成果があがってきたので、冊子にまとめようということになり、会員がポケットマネーを出し合って、二〇〇八年六月には『高橋文太郎の真実と民族学博物館――埋もれた国立民族学博物館前史――』を刊行することができた。マスメディアなどの報道も追い風となったのか、増刷するほど好評を博した。地元の方々のみならず、専門家や研究者にも多少評価されたとするならば、会員の労苦や努力が幾分かは報われたといえよう。

2008年公刊の冊子（全128頁）。写真資料多数

◉四事業の実施

会としてこれに満足することなく、二〇〇九年は民族学博物館開館七〇年にあたるこの機会に、渋沢敬三たちが目指した夢や精神をたとえ片鱗なりとも生かせる事業をと計画し、秋に実施することにした。

すなわち、（1）より広く世間・市民に民族学博物館や渋沢たちの遺したものを知らせる（2）単なるデスクワークでなく、館外においてこれを生かす実践をする（3）後世に伝え残す手立てをとる、という意図をもって、①博物館跡地に発祥の地を記念する銘板を建てる ②講演会を開く ③写真展を催す ④農具の展示・実演会をする、という事業である（②～④は二〇〇九年東京都文化財ウィーク企画事業として本市教育委員会と共催。また、銘板と写真パネルは終了後市へ寄贈）。

荷が重い試みであり、経費、労力、スタッフなどから実施を危ぶむ声もあったけれど、多少の無理は承知のうえ、チャンスを逸せずということで実施に踏み切った。

その結果の客観的な評価は外部に委ねなければならないにしても、銘板除幕式には、渋沢敬三氏のご遺族、国立民族学博物館の須藤健一館長、西東京市長など三四名の来賓のご臨席をいただき、滞りなく執りおこなうことができた。

また講演会は、国立民族学博物館の近藤雅樹教授に「渋沢敬三と民族学博物館」、東京学芸大学石井正己教授に「高橋文太郎著『武蔵保谷村郷土資料』の意義」の題で、感銘深いお話をしていただいた。写真展・民具展示会も盛会であった。多くの方々のご支援の賜物と深く感謝しているところである。

夢の博物館

渋沢 雅英（しぶさわ まさひで）
財団法人渋沢栄一記念財団 理事長

現在、敬三の没後五〇周年忌（二〇一三年）にむけて、特別展示や国際シンポジウム、書籍の出版など、記念となる催しの企画をすすめている。おもな書籍に『父・渋沢敬三』（実業の日本社）など。

1937年頃アチック・ミューゼアム1階の階段脇に陳列された民具〈渋沢史料館所蔵〉

だいぶ前のことになりますが、保谷の町に、わずかに残っていた戦前の博物館の建物の一室で、財団法人民族学振興会の理事会がおこなわれました。終わるころにはとっぷりと暗くなっていましたから、秋の終わりか冬の初めだったのだと思います。理事長の中根千枝（なかねちえ）先生とご一緒に、帰りの電車のなかで、生前の渋沢敬三の思い出や逸話の数々を話し合うなかで、いずれは振興会を解散し、公益信託に移行したいというお話がありました。

やがてそれが実現し、平成一一年には最後の資産が売却され、高橋文太郎氏や敬三が、若いころ思い描いていた、北欧式の野外民族博物館の夢も消えてゆきました。

ところが最近になって、西東京市の「高橋文太郎の軌跡を学ぶ会」の皆様から、「民族学博物館跡地銘板除幕式」へのお招きを受け、一一月八日、参加させていただきました。国立民族学博物館の須藤健一館長、近藤雅樹教授も来会され、記念すべき会となりました。

＊

生前の渋沢敬三は、博物館はもとより学術資料の収集、整理、編纂に強い関心をもっておりました。祖父栄一の没後、その業績の顕彰が話題となったときも、敬三は栄一の人生のすべてを網羅する資料集の編纂と、栄一とその時代の日本人の生活の変貌を伝える「実業史博物館」の創設を提案しました。戦局が緊迫するなかで、将来の博物館で展示すべき資料を懸命に収集し、平和の来る日をひたすらまっていました。

仕事の合間には、自分でも魚名の研究や、『延喜式』に見られる水産物の流通などについて研究し、「延喜式博物館」を作りたいと言い出したのを、まだ高校生だったわたしも感動をもって聞いたことを覚えています。

＊

これら多くの夢の実現を妨げたのは戦争でした。占領軍の政策で自分自身も財政的な基盤を失い、戦前から手がけてきた多くの企画が続行できなくなりました。「ニコ没（ニコニコして没落してゆく）」と称して、私生活の上ではそれをほとんど気に懸けることなく、学問の復興を願って、病魔に冒される晩年まで研究活動を続けていました。

しかし六七歳という早すぎる死を迎えた時点では、多くの仕事が未完のまま残されていました。本人は苦情めいたことは決して言いませんでしたが、心残りも多かったと思います。

早いもので、近く没後五〇年を迎えますが、その間驚くほど多くの故人の願いが、次々と芽を吹きはじめました。保谷に収蔵された民具のすべては国立民族学博物館に継承され、詳細な分析がおこなわれています。『渋沢栄一伝記資料』六八巻もほぼ完全にデータベース化され、実業史博物館のために集めた資料は国文学研究資料館によってすべて整理され、画像化もされて、近代化のモデルとして世界中で展示されています。

保谷の立派な銘板を拝見しながら、当時若かった方々の夢の数々が、戦争の苦しみを超えて、いつのまにか見事に蘇ったことを、嬉しく思った次第です。

1933年11月　アチック・ミューゼアムの談話室にて。前列左から2人目折口信夫、3人目早川孝太郎、後列左から4人目渋沢敬三、5人目高橋文太郎、6人目宮本勢助〈渋沢史料館所蔵〉